



土曜日は家族そろって食事ができる大切な時間。中央奥はジュニオールさんの父。

# Episódio 1

エピソード  
家族と仕事

Vivendo  
o dia a dia

## 辛く、悲しい思い出

来日して最初に勤めたのは市内のプラスチック部品製造会社だった。家族的な会社で、社長はポルトガル語の辞書を片手に、仕事を丁寧に教えてくれ、身の回りの心配もしてくれた。

一方、まちでは「差別」を経験した。来日して間もない16歳の時。休日となり、上田に住む友人に会いに出掛けた日のこと。駅の改札口を出ると、突然一人の男が目の前に現れジュニオールさんの腕を強引に引っ張った。男は、ジュニオールさんを引きずりながら強い口調で何かを言っている。そこからは「ガイジン」という言葉が聞き取れた。自分をのしっているようだった。

誰かが不正乗車をして、その犯



タイムカードを押し、勤務が始まる。左はポルトガル語で「入(社)」、右には「出(社)」と書かれている。

人だと疑われているらしい」。その後、駅員と話をすると、自分が無実であることがはっきりした。結局、本当の犯人はいなくなり、自分をのしった男は、弁解も謝罪もせず、人波の中に消えていった。ジュニオールさんは震える手を必死に押さえた。

## 日本は逃げ道ではない

ジュニオールさんが日本に来た動機は、お金だ。経済的な理由は切りたくても切れない。

「欲しいものが手に入ることが、どれだけ幸せなことか、こちらの人たちは本当に分かっているだろうか」。

時々、そう思うことがある。

しかしその一方で、心を許し合える日本の友人もたくさんできた。そしてこの地でミカさんという最愛の人とめぐり合い、かけがえのない家族と生活基盤を手に入れた。

ミカさんは言う。

「ブラジルでは20年がんばってやっと手に入るものが、日本では4、5年で手に入れられるというイメージがあつて来日する人がつきない。けれど、何の目的もなく日々を過ごしている人

は、往復を繰り返して、いつまでたつても何も残せないでいる」。

自分たちは、母国から日本へ逃げてきたのではない。愛すべき人を守り、その生活を支えている今、胸を張って、そう言い切れる。

そして、ミカさんのおなかには、小さな命が宿っている。

予定日は11月20日。

穂高で10回目の冬を迎えるころ、ジュニオールさんは、3人の父親になる。

## 生活者として市民として

バブル期の外国人登録人口激増から10年以上が経ち、その形態も変化しつつあります。そのひとつは「出稼ぎ」といわれた短期滞在から、家族で長期滞在するケースが増えてきたことです。市の外国人相談窓口には毎月100件ほどの生活相談が寄せられ、その数も増加傾向にあります。

6年前から安曇野の状況を見続けてきた市外国人相談員のハケオ・アルベスは「保険や税金など日常生活に関することや教育の問題など、相談の内容も多様化してきました」と指摘します。

また、「住民の意識も少しずつ変わってきました。違いを認めた上で尊敬し合える関係を、さらに築ければ」と話します。お互いの理解を深めていく中で、地域社会の一員として受け入れる姿勢が必要となります。

Vida de cidadão



ハケオ・アルベス

豊科総合支所勤務 外国人生活相談員

7:00 >>

夜勤を終えたパパが帰宅。二女サーラちゃんがお出迎え。



9:30 >>

お風呂に入れるのはおばあちゃんの役目。手際良く孫たちに服を着させる。

12:00 >>

今日のお昼は「フェイスン」。豆とベーコンを煮込んだ料理。ごはんにかけて食べる。パパはそろそろ寝る時間。



16:00 >>

パパのお弁当を作る。おなかの大きいのでぼちぼちやる。

19:10 >>

本日の勤務がスタート。ジュニオールさんについて、上司・坂口係長の評価「信頼できるし、信頼してくれる」。

